

わたしの母は現在82歳で、心配性という長患いのほかは、たいした病気も認知症もなく、東京で独り暮らしをしている。75歳まで、美顔サロンで働いていたので、それまでなんの趣味もなく、ただひたすら新宿に通勤していた。専業主婦になったときはすでに未亡人で、今は家事のほかにはアパート管理の雑務をひとりでこなしながら、やっと〈朗読〉という趣味らしき余暇を楽しむまでになった。

もともと好奇心の強い性格で、ある晩おそく、いきなり「トクナガ・ヒデアキを知っているか？」と電話をかけてきた。「ああ、徳永英明ね」とわたしがエラそうに言うと、「コワレカケタラジオを知っているか？」ときいてきた。「ああ、〈壊れかけのラジオ〉ね」と、ますます先輩ぶって答えると、「なーんだ、そんなに有名なの」と、少しがっかりした声。

というのは、母は生まれてはじめて、徳永英明の、あの変声期真最中のような歌声をラジオで聞いて、しびれてしまったのだという。もしかして、デビューしたばかりの新人なら、あたしが率先して応援したいというくらいの意気込みだった。

その翌週、わたしは上京したおりに、母といっしょに徳永英明のCDを買いに行こうと決めていた。どうせなら銀座に行って、帰りにはぜったい、あんみつを食べる！

ところが、こちらの期待に反して、母はすっかり忘れていた。「トクナガ・ヒデアキって、いったいだれなの？」あげくに、「いやだわ、そんな不幸なラジオ」と言ってのけた。

あの日以来、わたしの頭の中で、行き場を失ったあんみつの亡霊が、ときには大きくふくらんで、今もわたしを悩ませる。